

観光ポスター
制作年代不明
(個人蔵)



「くんちポスター」
1956~58年頃
(長崎歴史文化博物館蔵)

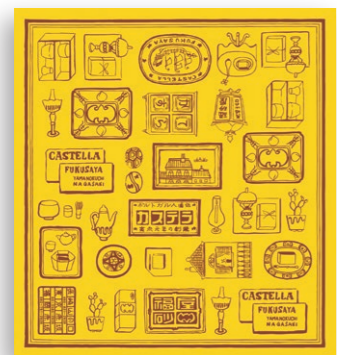


「日本万国博覧会ポスター下絵(一等)」
1937年
(個人蔵)



観光ポスター
制作年代不明
(個人蔵)

その人は
長崎を
デザインした。



福砂屋包装紙
(画像提供:株式会社カステラ本家福砂屋)

きつけるのだと思います。現在、私たちが目にする多くのポスターは写真と文字を組み合わせたものが多いですよね。ところが、中山の作品は絵画が語り、文字は最小限。それも私たちが新鮮さを覚える要素なのだと思います。中山には幻の作品がある。一九四〇年に開催される予定だった「日本万国博覧会」のポスターがそれだ。この時、応募した中山の作品は一等と三等を受賞。しかし残念ながら、日中戦争の影響で博覧会は中止となってしまった。ただ、当時、全国のあらゆるデザイナーが取りたかかった賞の受賞により、中山は一躍名をはせることとなった。

その後、中山は九州のデザイナーを束ね、全国的な仕事をする一方で、地元企業のポスターや小さな飲食店のマッチをデザインするなど、暮らしを彩るデザインも数多く手掛けた。その一つが「長崎くんち」のポスター。く

んちの装束を身に付けた子どもが描かれた一枚は、なんとも言えない風情をたたえている。「このポスターからは、くんちの澄み切った神聖な空気が伝わってくるようです。神事としての厳かな空気をまとったくんちの情景を見事に切り取った一枚だと思います。そこには長崎人ならではの感性が発揮されていますね」。

川口さんは、中山を「長崎をデザインした人」だと話す。「本人としては一つの仕事に向き合っていた、ということなのだと思いますが、生涯にわたり長崎を描き続けることを通じて、長崎をデザインする“という大きな仕事を成し遂げた人だと思います」。

才能溢れる中山であったが、上京することなく、長崎の地で筆を続け続けた。長崎をデザインしたグラフィックデザイナーは、故郷をこよなく愛した人物でもあった。

グラフィック・デザイナー

中山文孝

Nakayama Yoshitaka
1888-1969

中 山は一八八八年、長崎市で生まれた。中学卒業後、父が開業した扇子とうちわの店「中山美六堂」の家に従事する傍ら、観光ポスターや企業の包装紙のデザインを行い、また長崎の文化財の記録写真も手掛けた。独学で日本画を学び、学生に絵やデザインも教えていたという。

川口さんは、中山が活動を始めた一九三〇年代は、ポスターの転換期だっ

たと話す。それまでの日本のポスターは、女性を中心に描いた上で企業名や商品名を入れるというのが主流であり、いわば「印刷された絵画」のようなものであった。それがデザインへと変化していったのが一九三〇年代だという。「しかし絵画からデザインへと変化していく時代にあっても、中山の作品は絵画の力が失われていません。それこそが彼の特徴であり、私たちを惹



中山文孝(個人蔵)